

氷海の挽歌

戸川幸夫



氷海の挽歌

昭和四十九年八月一日 初版発行

著者 戸川幸夫

発行者 増田義彦

発行所 実業之日本社

本社 東京都中央区銀座一―三―九

TEL 〇三(五六二)四三一一

振替 東京三二六番 千一〇四

関西支局 大阪市北区真砂町五三

TEL 〇六(三六三)一七〇六

印刷 研文社 製本 共文堂

乱丁、落丁の場合はお取り替えいたします

氷海の挽歌

戸川幸夫



実業之日本社

もくじ

氷海の挽歌……………7

密猟者……………51

青いレンズ……………89

文明と原始の間で……………131

クレメンツの贈り物……………155

ライオン軒の行脚……………181

ガラパゴスの案内人……………217

不幸なルーファス……………243

氷海の挽歌

氷海の挽歌

一

眠くなるような暖い日であった。

大空は、指差せば指の先が青く染まるかと思えそうなほど深く澄んでいた。そして、その蒼空の広がりの中ほどに春の太陽がぎらぎらと輝いていた。

一点の雲もなく、一陣の微風もなかった。

だから、流水の群は長い数条の帯となって、満ち満ちた光の世界の中を、潮の流れに乗ってゆったりと南下していた。

流水の群も眩くような光に満ちていた。そして、それらの氷盤を支えているオホーツク海すらも瑠璃に輝いている。

一つの流水のあとに、他の流水が続いた。潮の流れの関係であろうか、流水群は横にひろがらずに一本の長い帯となって流れてゆく。すると他の流水の帯がそれに平行して流れる。流水帯は、大空から見下したらきつと紺地に銀白の美しい縞模様をつくり出していたに違いない。

流水帯の内部は別天地であった。波の荒いオホーツク海に浮んでいながら、氷の溶解が、波の粒子の活動を喰いとめるのか、それとも氷盤の帯が防波堤の役目を果たすのか、とにかく流水帯と流水帯に挟まれた内部の海面はとろりと澱んで、小波ひとつ立たず、まるで古い池か沼の表面を見るようであった。

猛スピードで走っている列車や、ジェット旅客機の内部の空気が車体や機体の外壁に護られて、そ

のまま移動しているのと同様に、流水帯で挟まれた海水は、容器の中の水としてそのまま移動しているのかもしれない。

ものの音すらなかった。しいんと静まりかえった死の世界といえる。

音を伝える空気の振動は、氷盤の表面にこびりついている雪の粒子によって吸収されてしまうからなのだろうか？　だが、全然、音がないわけでもなかった。じいっと耳をすましていると、ほら、聞えてくるだろう。ポトン……ポチリン……チン……ポツン……と小さな銀の鈴を小人が叩いているような音が……。音の源を捜してみると、盛り上った氷の板や、氷の柱の先から、春の陽に溶けた滴がしたたり落ちて、下の氷盤や海にぶっつかって発する音なのだ。

トボン……とこんどは少し大きな音が水面で起って波紋がひろがる。ぬっと水の中から顔を出して、四辺の様子を窺っていたアザラシが、なにごともないので再び水中に潜った音だった。

なにごともない時の氷海は、たしかに平和そのものといえた。

一頭の大きなゴマフアザラシが、氷盤の上でうつらうつらと居眠りをしていた。そこはいつかの嵐で氷盤が激突して重なり合い、そのまま凍結してしまったところなので氷が山のように盛り上り、そのために陽だまりになっていて特に暖かだった。

氷盤の先端の平らになった部分では、陽に溶けた水が、小さい水たまりを作って、ぎらぎらと、どぎつい反射光をまき散らしていた。

その水たまりの傍にカモメが三羽とまっている。そして海を挟んで少し先の氷山の頂きには一羽のオオワシが翼を休めていた。

ほんとに平和な風景であった。

ところが、それも長くは続かなかった。

うつらうつらしていたゴマファザラシがぱっと眼を見開いて、首をもち上げ、ひくひくと鼻をうごめかした。水中の生活に重点を置き、いつも陸では腹這っているために視界の狭いアザラシたちの眼はあまり良くない。その代り耳と鼻だけは、とても敏感であった。

何かが近づいて来ている——そんな予感がした。やれやれ……というふうにあザラシは身を起した。そして万一を考慮して氷盤の縁まで這っていった。

そのとき、彼よりは数十倍も、数百倍も眼の鋭いオオワシが接近してくるものの正体を見つけて、ぱっと飛び立った。

それを見ると、もう躊躇しなかった。アザラシはするりと海の中に身をすべりこませた。波紋も生ぜしめないような巧みな逃避だった。

三羽のカモメだけが逃げなかった。カモメたちは人間から保護されていて、危害を加えられないことを知っているからだった。

やがて山になった氷の蔭から、一人の人間が姿を現わした。男は、白い狩衣をまとっていた。上着も、ずぼんも白い布でつくられていた。帽子も、寒風よけの覆面も白であった。手袋も白——白づくめであった。白でない部分といえば、覆面の下からちらりと覗いている肌の色と、その鋭い眼、それに長靴、肩にしたライフル銃、手に持った槍のようなハヤスキの先だけだ。彼の肌は太陽と氷雪に灼けてレンガ色になっていた。ライフルの銃身は黒く、ハヤスキの先の鉄の部分も黒かった。長靴は氷の上でもすべらないためにゴマファザラシの皮で作られていたので、アザラシの豹紋がくっきりとついている。

「畜生ッ、たしかに居たと思つたがなあ」

と彼はひとりごとを呟く。それから胸に下げた双眼鏡をとって、見まわした。さっきまでそこに居たオオワシが、ずっと先の氷盤にとまっていた。

「ワシの奴が、知らせたな」

男はもう一度ひとりごとを言った。

一隻のボートが、沼のような水面をかき乱して、まわり込んできた。ボートも白く塗られていた。そしてボートを漕いでいる男も、銃をもった男同様に白づくめの装束をしていた。

「キタさんよ。逃げられたのケ？」

ボートの男が低い声で言った。鉄砲を持った男より二つか三つ若いらしい。

キタと呼ばれた鉄砲の男は返事もしなかった。逃げられた——と言われたことがベテランとしての権威を傷つけられたようで、少し腹を立てていた。ボートの男は無神経らしく、ボートを氷盤につけると、あがつてきて、

「いいバオイだったのにな。惜しいや」

ともう一度、気にさわるようなことを言った。

「ごてごて言うなッ」

とキタが怒鳴りつけた。

「何も俺あ……ただ、いいバオイだから惜しかったな、と言っただけだよ」

「うるせえ、黙ってろ。黙ってねえと……」

キタはハヤスキを持ち直した。ボートの男は飛び退って、

「兄貴、かんべんしてくれ、もう言わねえよ」

怯えた顔になって掌を合せた。

ハヤスキ——それは北海道のトドやアザラシ狩の猟師たちが使う猟具の一種で、槍のような長い木の柄の先に鉄の鉤と穂がついている。片鎌槍のようなものだが、あれほど鋭くはない。これで氷盤を突っ張ったり、引き寄せたり、獲物を撲殺したり、ひっかけたりするのに使う。だが、気の荒い狩人たちはこれを喧嘩や折檻の道具にもよく用いた。これで殴られたら、ひどい怪我もする。ボートの男が怯えたのもむりからぬことだった。

二人はトツカリ船（アザラシ狩の船）北海丸の乗組員だった。銃を持つ方は射手^{ハンター}さんと呼ばれ、狩場に出ては船長よりも権力をもっている。ボートを漕ぐのは柄取^{ともどり}と呼ばれ、ハンタさんの助手の役目だった。

ボートの底には既に獲物のゴマフアザラシが三頭にクラカケアザラシが一头ころがっていて、四頭の死体から流れ出した血が舟底に溜り、舟がゆれるたびにゴボゴボと音を立てた。ゴマフアザラシのことを彼らはバオイと呼んでいた。それはトツカリ猟師仲間の符牒で、同じようにクラカケのことをアラハと言う。

「兄貴、四つも獲ったんだから本船に帰って昼飯^{ひるめし}にするか」

柄取が機嫌をとるように言う。だがキタはそれにも答えず双眼鏡を眼にあてて見まわしている。柄取は所在なく、

「それにしても馬鹿にいい天気だ。一服すっかなあ……」
ひとりごとを言って氷盤にあぐらをかいた。

「いねえなあ……」

キタもしばらくして、やや機嫌をなおして柄取の傍に腰を下した。

本当に眠くなるようないい日和だ。

「俺たちが眠くなるようなときは、トツカリだって眠くなるはずだがね」

柄取は胸のポケットから煙草をとり出した。

「煙草はいけねえ」

キタはまた叱った。嗅覚のすぐれているトツカリは、煙草の匂いを嗅ぐとすぐに逃げるからだ。

「だってトツカリ、居ねえもの」

「馬鹿野郎ッ、居るか居ねえかわからねえじゃねえか……。煙草は船にもどってからにしろ。」

テツ、そんな心がけじゃあ、いつまでたっても一人前のハンタにゃあなれねえぞッ」

俗に柄取三年といわれ、柄取を三年修業してハンタの動かす手の合図で、ハンタの思うままにボートが操れるようになってからでないと、射手になることは許されない。アザラシを撃つのは、まずどうやって接近するか、ということが一番難しい。

氷盤の上に居るアザラシを見つけたら、風下の方からボートの音をさせないようにしてそっと近づいてゆく。隠れ場所の少い海のことだから、氷盤から氷盤へとまわりこみ、それも不可能なときにはボートのへさきに氷の塊などを置いて体をかくして近づく。離れているときはオールで漕ぐが、いよいよ獲物に近づくとピンポンのラケットのような權でそっと漕ぐ。

ボートから撃つときもあるが、出来ることなら獲物の乗っている氷盤に乗り移ってから撃つ方が成功しやすい。波にうねりがあると氷盤も揺れ、ボートも揺れるから命中率がぐんと悪くなるからだ。

氷盤に上ったらハンタは銃を構えて、そろそろと這って前進する。そして氷の蔭から頭を狙って撃つ。頭以外だとたとえ命中しても彼らは海中におどり込み、そのまま海底に沈んでいってしまう。

うまく頭に命中すると、アザラシは悲鳴もあげずに、ころりとひっくり返る。もともと陸では腹ン這いになっている姿勢の低い獣なので、ひっくり返っても仲間はずかぬことがある。腕の達者なハンタが、風下の離れたところからライフルで、うまく命中させてゆくと、そこに居るアザラシを全部獲ることができるという。キタも、そうやって一度に七頭のアザラシを仕とめたことがあり、それが彼の自慢だった。

二人はしばらく黙って氷盤の上にひっくり返っていた。朝からの緊張がほぐれて、快い眠気がおそってきた。思わずうとうととした。そしてどれくらい時間が経ったろうか、何処からかチュク、チュク、ル、ル、ル……と低い囁きの声が聞えてきた。ハツとしてキタは眼を見開いた。だが心得のある狩人らしく、いきなりがばッと跳ね起ることはしなかった。

頭だけをそっと持ち上げて四辺を窺った。隣ではテツが安らかな寝息をたてている。

こいつの寝息ではないな、と思った。キタは静かに起き上った。

チュク、グワ、チュル、ル、ル、ル……陸言を交しているようでもある。それはたしかに、人間ではない野獣の声帯から発せられる声だった。それにしてもなんと優しい囁きなのだろう。

じっと耳をすますと、その声は背後に重った氷の山の裏側から聞えてきているようだった。キタはライフルを握ると、氷の山を登りはじめた。ボートでまわりこむという方法もあるが、却ってこの場合は相手に発見されやすいと思った。

氷の山は四メートルほどの高さだった。用心しながら頂上に達し、そおっと顔を覗かしてみると、